

《2009年1月例会ーサロン in 金沢ー報告》

※「サロン2002」は、下記のAC-21 関連テーブルトーク&交流戦「タッグパートナーとしてのスポーツとアート」(主催:金沢21世紀美術館)開催に協力した。以下は、金沢21世紀美術館の許諾を得て、同トークの内容を再録したものである。また、「サロン2002」会員は、この催しに参加することで「サロン2002」2009年1月例会への参加とした。

(1) イベント概要

【名称】AC-21 関連テーブルトーク&交流戦「タッグパートナーとしてのスポーツとアート」

【日時】2009年1月18日(日) 14:00~15:40(トーク) ~16:00(交流戦) ~17:00(交歓会)

【会場】金沢21世紀美術館(石川県金沢市広坂1-2-1)

会議室1(セミナー&交歓会)

長期インスタレーションルーム(KOSUGE1-16 作品《AC-21》展示場所)(交流戦)

【主催】金沢21世紀美術館 <http://www.kanazawa21.jp>

【協力】サロン2002

【プログラム&演者】

1. 事例報告とディスカッション 14:00~15:30

1) クラブの法人化を進めているFC.TONからの報告 ...辰巳義和(FC.TONクラブマネージャー)

2) 金沢21世紀美術館で行ったKOSUGE1-16の活動報告 ...土谷享(KOSUGE1-16代表)

3) DUOリーグとKOSUGE1-16が行った「DUOリーグのトロフィーがない!プロジェクト」の報告

...中塚義実(DUOリーグチェアマン/サロン2002理事長)

佐藤いちろう(靴郎堂本店 代表/靴アーティスト/クツ創家)

(司会) 鷺田めるろ(金沢21世紀美術館キュレーター)

2. 交流戦 15:45~16:00

KOSUGE1-16 作品《AC-21》(巨大サッカーゲーム)をつかっでの交流戦(トーク終了後、15分程度)

3. 交歓会 16:10~16:40

(2) 例会参加者

【参加者(会員)10名】宇都宮徹壺(サロン2002) 小林俊文(渋川青翠高校) 木幡日出男(東京成徳大学) 田中理恵 土谷享(KOSUGE1-16) 中塚義実(DUOリーグチェアマン/サロン2002理事長) 中村敬(みどりSC(東京・墨田)) 福西達男(NPO法人ポルベニルカシワラスポーツクラブ) 松田保(びわこ成蹊スポーツ大学) 依藤正次(NPO法人横浜スポーツコミュニケーションズ)

【参加者(未会員)30名】佐川哲也(金沢大学) 橋本祐之(金沢二水高校(陸上)) 小泉修(NPO法人東京スポーツビジョン21) 牧井茂(八王子サッカー協会) 松本多美子・山田真弓・奥祐司(FC.TON) 榎本きみ子(かなざわ総合スポーツクラブ) 野村信行(VIOスポーツクラブ) 中谷俊也(市民スポーツ課) 加藤寛(ヴィッセル神戸) 吉田亮一(県立小松養護学校) 越森佳奈(金沢市スポーツ研究会) 松本光弘(JFA 参与/平成国際大学教授) 岡俊彦(神戸フットボールクラブ) 松井清揮(コンサドーレ札幌) 悦勝公豪(大阪府立阿武野高校) 久保幸平(滋賀 BSC) 川端暁彦((株)スクワッド) 越田剛史(北陸大学) 山田雄一郎(中日新聞) 堅田浩一(FC.TON アシスタントマネージャー) 井上哲平(アドブルナー) 佐藤いちろう(靴創家) 辰巳義和(FC.TON クラブマネージャー) 割出勇也(金沢工業大学) ほか4名

注)参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

【報告書作成】割出勇也(金沢工業大学大学院)

タッグパートナーとしてのスポーツとアート

<目次>

はじめに (鷺田めるろ)

1. 金沢でクラブの法人化を進めている FC.TON からの報告 (辰巳義和)
2. 金沢 21 世紀美術館で行った KOSUGE1-16 の活動報告 (土谷享)
3. DUO リーグと KOSUGE1-16 が行った「トロフィーがない！」プロジェクト報告 (中塚義実・佐藤い
ちろう)
4. 演者間の意見交換
5. フロアーとの質疑応答

はじめに (鷺田めるろ)

金沢 21 世紀美術館キュレーターの鷺田が司会を務めさせていただきます。よろしくお願いします。

本日は、スポーツとアートのタッグが社会を楽しいものに変化していけるかを中心のテーマとして進めて行きます。

最初事例報告として 4 人のお話を聞いた後にディスカッションをします。まず、金沢のサッカークラブのクラブマネージャーをされている辰巳義和さんから FC.TON の活動について紹介していただきます。次にお話いただく土谷さんは、KOSUGE1-16 というユニットでアーティストとして活躍されています。昨年、美術館で開催され、FC.TON とコラボレーションしたプロジェクトについて紹介いただきます。続く、中塚さんは、高等学校で教鞭を執りながら、東京のサッカーユースリーグ「DUO リーグ」を立ち上げ、チェアマンをされています。DUO リーグと KOSUGE1-16 さん、靴アーティストの佐藤いちろうさんのコラボレーションとして行われた DUO リーグのトロフィーを作るプロジェクト「トロフィーがない！」について中塚さんと佐藤さんから紹介していただきます。

1. 金沢でクラブの法人化を進めている FC.TON からの報告 (辰巳義和)

1) 辰巳義和の自己紹介兼 FC.TON の概要

簡単に説明させていただくと、FC.TON のクラブマネージャーで、FC.TON ユースという高校生チームの監督もしています。本業は、特別支援教育学校の教員をやっています。

FC.TON は、サッカーの任意団体で、法人化を目指しています。チームは、未就学児からシニアまであり、女子 3 チームを含めて 10 チームあり、選手数は現在 288 名です。これに選手登録していないコーチを含めると、約 300 人になります。

FC.TON の名前の由来ですが、小学校を舞台とした戸板サッカースポーツ少年団が最初に結成され、途中から隣町の長田町小学校の子供たちもそのチームに加わるようになりました。そこで、戸板の『T』と長田を『N』を『ボール』で挟んで、FC.TON というチーム名になりました。

2) FC.TON の歴史

うちのチームの歴史を簡単に説明させていただきます。どこにでもある話ですが、サッカーと無縁の小学校にサッカー好きな先生が転任してきて、一気にその先生が情熱でサッカーを少年たちに教えて、「じゃあ少年団を立ち上げようや。」ということで作ったのが始まりです。私が小学 6 年生の時 (1973 年) で、私たちが一期生となります。

その時に、小学生の先生だけでは運営が難しいので地域の人たちを半ば強制的にスタッフとして加えていきました。私の父や、近所のかまぼこ屋の親父などはコーチなどにさせられました。この体制は約7年間続き、8年目(1980年)に高校を卒業した1期生が集まり、「俺らを中心とした大人のチームを作ろうとやないか」ということで、結成したのが社会人チームFC.TONです。この社会人チームの結成時にチーム名をFC.TONに改名しました。

社会人チーム結成後、高校を卒業したての1期生の『彼女』たちが、当然のように応援に来ました。観戦するうちに彼女たちは、サッカーの魅力に取り付かれ、自分達もプレーしたいとして、女子チームFC.TONレディースが結成(1984年)されました。

FC.TONが社会人チームの県リーグ1部に昇格したとき、1期生は体力的にジュニアから育った若い人たちと一緒にプレーできなくなり始めていました。しかし、そのまま引退するのもつまらないので、社会人チームのBチームとして、トノールド(TONOLD)を作りました(1987年)。その後、OLDとしての役割はシニアが受け継ぐことになり、現在のTONOLDはTONの2軍としてトップチームを目指す選手のチームとして活動をしています。同じようなことが女子チームでも起こり、TONOLDレディースがつくられました(1994年)。ママさんチームとありますが、ママさんだけではありません。

ジュニアの方にも女子の子が入り一緒に練習していましたが、男子の中になかなか入れない子が数名いました。競技人口を増やすためには、女子のチームも作らなければならないということでTON少女隊というのを作りました(1994年)。しかし、この名前はアイドルグループから取られたのですが、アイドルグループの方の少女隊は、あっという間に解散してしまいました。

社会人のチームに高校サッカー部を辞めた子供達が何人も遊びにきていました。彼らこのままじゃもったいないよな、でも社会人の1部リーグに出すには少し辛いだろうな、練習だけをさせておくのも少しかわいそうだなということで、何人か仲間を連れて来させて15人程がそろい、作ったのが高校生のチーム、FC.TONユース(1995年)です。

それから10年ほど新規チームを作ることが停滞していましたが、2005年に未就学時のチームFC.TONキッズを作りました。組織内に保育士でキッズリーダーがいて、良き指導により、子供達が喜んでサッカーをやっています。

先ほど申し上げたFC.TONシニアは、TONOLDでも体力的に無理になってきた連中でおなじく2005年に作られました。

ここまで来て、一つだけ出来ていないのがジュニアユースです。金沢でも他の先行団体が立ち上がり始め、ジュニアユースチームを作れるなと考えていました。2006年に社会人トップチーム選手の子供達の何人かが中学生になったのをきっかけに、ジュニアユースチームを作りました。北信越だけでみると、全ての種別があるのは私たちのチームだけです。

私たちのチームは、生涯サッカーを目指し、生涯サッカーが出来る環境を整えることができたと考えています。シニアの世代がさらに年をとったら、さらに上のシニアを作るなど、ニーズに合わせてチームを作って行こうと考えています。

ただ、レディース部門が少し弱く、中学生・高校生のチームを作ろうと考えていますが、石川県では女子のサッカー競技人口が少なく、まだまだ11人が均質に集まらないのが現状です。その為、レディースは、中学生から大人まで一緒にプレーしています。我々の活動が続いて行けば、あと少しで中学生・高校生のレディースチームが出来ると考えています。

3) ファミリーとしてのFC.TON

私達は、ファミリーです。先ほど申し上げたように、私が父親から指導しろと大学出たての時に言われ、運営指導を親達から受け継ぎました。設立当初コーチだった「かまぼこ屋の親父」の娘と息子も、今ではりっぱなコーチです。また、私たちのクラブチーム内で10数組が結婚しました。夫婦で選手をされている方が多くいらっ

しゃいます。その夫婦の子供達も多く来て来てくれていますので、親子で選手というケースもたくさんあります。両親のどちらかが、私たちのチームに所属していれば、お子様もチームに入れてくれることが多いです。

サッカー経験がない保護者の方も、選手になってもらえるようどんどん誘っています。シニアの選手の約3分の1は、未経験者の保護者です。保護者の方も、子供と同じようにプレーして楽しんでいただいています。

うちのチームの特徴は、その気になればどのチームの練習にも参加できることです。それぞれのチームは、週2回から4回の練習しかありませんが、例えばユースの選手がトップチームの練習に今日混ぜてくださいとって加わったり、TONOLD レディースの練習に子供がいっぱい来たりしています。これは元々自分の子供を連れてきているのですが…、本当にどこの練習にもみんな参加できます。そのため、日曜日の練習も含めて1週間まるまるサッカー漬け、うちのチームの中でサッカー漬けになることもできます。

指導者は、ジュニアが10数名、ジュニアユースが5名ほどいますが、ほとんどがFC.TONで育っています。ジュニア出身、あるいはそうでなくてもうちの社会人の選手を経験した選手、あるいは現在の現役選手にお願いしています。

さらに、各チーム単独で動くだけではつまらないので、ファミリー行事としてフェスティバルとかボーリング大会など、いろいろファミリーで楽しめることをしています。上の世代の選手が下の世代の選手の名前と顔をどんどん覚えていって欲しいなと思っています。

男女、大人子供が入り乱れて、サッカーをすることはFC.TONでは、珍しい光景ではありません。トップチームの選手達も子供達と遊んだりしています。

うちの情報誌は、A4サイズ1枚の表裏ですが、全員に配布しています。子供達にはペーパーで、大人達にはメールで発信しています。各チームの情報をこの表裏で出しています。

4) FC.TONの今後

今後、私たちが目指すものは、さらに誰もが心地よくプレーできる環境だと考えています。先ほど申しましたように、ニーズがあれば新たなチームをどんどん立ち上げていきたいです。それから、芝のグラウンドと融通が利く体育館、クラブハウスのようなファミリーが集い語れるような場が欲しいなと思っています。ファミリーとしてもっと発展していきたいです。もちろん交流行事、法人化したらグッズなどもつくっていききたいなと考えています。最終的な目標ですが、地域全体がファミリーになれば良いですね。

プレイするだけがスポーツじゃないと思います。観る、応援する、参加することがスポーツであり、皆さんがうちのクラブに関わってくれて、全体がファミリーになる。

昔の村というのは、犯罪が少なかったと思います。みんなが声を掛け合っていて、戸締まりをしなくても何も盗まれず、パッとあがって「おーい元気か」という村だと思うんですよ。最近、物騒なので皆さん戸締まりをしている。そうじゃなくて、やはりみんなが声を掛け合って明るい村を作っていけば、地域全体で犯罪とかも少なくなるかなということを目指しています。

法人化を目指してという題でしたので、法人化すると社会的認知度が高まるとか、地域の人を巻き込みやすくなる、行政のバックアップを受けやすくなる、グラウンドや体育館の指定管理者になれないかなということで、私たちの思いが、夢が実現に促進できるんじゃないかなと思っています。

私たちのミッションですが、特にこれからは、地域の方々でも気軽に楽しめる、サッカー以外でも楽しめるスポーツなどをしていただいて、一緒に文化形成できないかなと思っています。

今回、21世紀美術館でKOSUGEI-16さんとサッカーゲームでコラボさせていただいて、スポーツだけでなく、大きな意味での文化形成ができればと考えています。

最後に、私たちのスタンスです。私たちは、ビルドアップを考えています。私たちが今できることを下から積み上げていき、決して無理はしたくないです。遅々として、なかなか進みませんが、やはり我々はファミリーです。ファミリーを崩さないで無理しないで着実に一歩ずつ歩んで行きたいと思っています。

2. 金沢21世紀美術館で行った KOSUGE1-16 の活動報告（土谷享）

1) KOSUGE1-16 の紹介

KOSUGE1-16 というのは、2人のアーティストユニットの名前なんですけれども、この由来は、僕らが今暮らしている借家の住所です。東京都葛飾区小菅 1-16 に住んでいます。これで、手紙を出せば届くかもしれません。

名前にも反映されていますように僕らは、特別なアート活動というのを志してはいなくて、地域や生活の中でのアートの価値観というものをもう一回見つめ直してみるような実践をしていこうと考えています。

それが、直接作品づくりということに関わるかは、わからないですけども、例えば、今回 FC.TON さんとコラボレーションさせていただいたり、隣にいる中塚さんの DUO リーグなどと、色々な所とつながりながらアートの要素をいろんな社会の価値観の中で生かして行こうと思っています。

小菅は、良く言えば東京の下町、東京の人達からすると東京の田舎ですが、それゆえに戦後のまま緩やかなご近所付き合いが残っています。僕は埼玉出身で、奥さんは福島出身ですけども、福島から新鮮な野菜が季節ごとに食べきれないほど届くんです。これをご近所や接している所に、みんな配ります。

僕は、アーティストという仕事柄、大工仕事なんかが得意です。周りに住んでいるのは、高齢者ばかりなので、例えば物干が壊れたから修理したり、壁の裏に猫が入ってしまい出られないから救出したり、古い町なのでネズミ出没情報をご近所と共有したりしています。

隣組などに入っていますが、忙しいという口実で出席したことはありませんが、あまりもののお団子とか届けられます。帰宅して、郵便を確認するためにポストを開けると、ご飯やおかずが入っていたり、ドアノブにポテトチップスの食べかけのものがかかっていたり、そういうことが小菅で起こります。普通、アーティストは、出社したりしないので、ご近所の人達に暇人と見られているみたいです。そのため、「お兄ちゃん、バイトをしないか」と言ってバイトを紹介してもらったり、お裾分けの範囲で猫が生まれたからという理由で、子猫がお裾分けされたりします。私生活空間への近隣住民のほど良い越境があります。そういう、越境行為が嫌いな人もいらっしゃるかもしれませんが、僕らにとってはすごく古いつきあい方なのかもしれませんが、僕らにとっては新鮮でした。それが、生活環境を楽しく豊かなものにしていて、思いました。

KOSUGE1-16 の作品制作のキーポイントは、『もちつもたれつ』ということにしています。

2) 金沢21世紀美術館における KOSUGE1-16 の活動

KOSUGE1-16 は、いろいろな作品も創っていますが、今回は金沢21世紀美術館で FC.TON さんとおこなったプログラムを中心に映像を交えて紹介させていただこうと思います。

秋に、金沢アートプラットホームという金沢21世紀美術館主催の、「まち」を舞台にしたプロジェクト型の展覧会が行われました。僕らは、等身大の巨大紙相撲大会、巨大なサッカーゲームを金沢に持ち込んでプロジェクトを行いました。

紙相撲の方は、さっくりと説明しようと思います。金沢市内の合計6カ所を巡業しまして、最後に中央体育館で千秋楽をしました。国技館の屋根を作って中央体育館でおこないました。懸賞もすごい数を集めて下さいまして、本物サイズの紙相撲大会をおこないました。サイズが本物ということだけではなく、大相撲が持っている地域を巻き込む仕組み、例えば「タニマチ」や「四股名」の付け方といった所で、制作者の手を離れて、いろんな人の参加を促すような試みをおこないました。なので、千秋楽で理想的なのは、タニマチになった人が応援に駆けつけてくれることや、名前を付けた力士を応援するなど老若男女関係なく参加できる企画です。

今回の金沢の試みには、FC.TON さんと、もう一つ NPO 法人のかなざわ総合スポーツクラブさんが関わってくれました。FC.TON さんは、巨大サッカーゲームにおいて FC.TON レディースとキッズを出動させて下さいまして、僕らのサッカーゲームに使っている人形の塗装するワークショッププログラムとサッカーゲーム本体そのものを組み立てるガテン系のワークショップに参加して下さいました。

通常、美術館の展示などは、アーティスト本人や専門の業者さんが施工して搬入するのが普通ですけども、そのプロセス自体も地域の人たちとおこなっていこうと、僕らにとっては新しい試みをさせてもらいました。こ

れを快く辰巳さんが引き受けて下さって、大会当日は辰巳さんにサッカーゲームの審判をやっていただきました。辰巳さんもフィギュアの一部になったという感じですね。

もともと、相撲もそうですがサッカーゲームにおいて、僕らがサッカーをすごく好きというところから始まっているという訳ではなく、僕らが地域の中でアート表現を行っている時に、今日も来ていらっしゃいますが、中村敬さんというキーパーソンに出会ったからです。彼は、東京の両国のサッカークラブで監督をされていて、当時はコーチでした。そのローカルなクラブがどのようにして、地域の中に根付かせていけるかということが、彼自身の心の中のテーマでもありました。

僕らのアートのやり方も特別なギャラリーや美術館などのアートの装置を離れて、家の中や街角などにアートを仕掛けるという試みをおこなっていました。その、試みに興味を持ってくれて、サッカーでも特別なグラウンドがなくてもプレイできるだろう、という価値観で関わって来てくれたと思います。

3) AC-21 について

2008 年の 9 月 6 日に、21 世紀美術館のキッズスタジオを使ってワークショップを行いました。サッカーゲームの性格上、2つのチームに分かれます。片方のチームは、21 世紀美術館の愛称が「まるびい」なので、キッズスタジオのプログラムによく参加してくれている子供たちと FC.まるびいを作りました。もう一方、FC.TON の未来のユニホームというテーマで、FC.TON キッズの子供たちとレディースの方々がデザインして、思い思いにユニホームを人形に塗っていただきました。ただし、サッカーのユニホームに使ってはいけない色、使ってもいい色、ファイブカラーというものがあり、それを辰巳さんから指導いただきました。

各ユニホームを塗装しただけでなく、プレーヤーの性格や得意技も考えてもらいました。それが直接サッカーゲーム装置そのものに反映されるわけではないんですが、そういう遊びを考えてもらいました。それから 1 週間挟んで、組み立てワークショップに入ります。全長 12 メートルあり、大人が組み立てても半日から 1 日かかりますが、それをあえて子供達と挑戦してみました。

ねらいは、美術館が、与えられる場ではなくて、市民の人々にアートに仕事で直接関わっていない人にとって、美術館の仕組みの一部として自分達の間をつくってもらおう、という思いがありました。幼稚園生なんかもいて、ねじ回しも初めての子がほとんどでした。学校なんかでは、難しいからといってやらせないことが多いと思いますが、あえて全部やらせました。最後は僕がチェックしますが、やらせてみると、最後は特に教えなくてもできるようになっているぐらい、子供達は吸収が早く、僕らが職人さん達と一緒につくと、4、5時間かかるんですが、この日は 2 時間半ぐらいで組み上がってしまいました。

12 月にこのサッカーゲームを使って、AC-21 カップを行いました。AC-21 とは、今回の金沢でのサッカーゲームの作品名です。こちらを FC.TON さんに本物の審判をしてもらいました。NPO 法人のかなざわ総合スポーツクラブさんからチアガールが派遣され、21 世紀美術館からは、けん玉達人が来ました。当然、アスリートのような方が必要かもしれませんが、ご覧のようにこのチームは 1 歳半の子と、3 歳の子とお母さんのチームです。しかも、決勝戦です。ゴールを決められて泣いてしまいましたが、見事に準優勝を勝ち取りました。優勝したのは、組み立てワークショップにも参加した子供達の小学校チームでした。

大人だから強いというわけではなくて、技術の差を相対化してしまうような装置だと思っています。今回金沢で行った報告はこのぐらいにして、僕のプレゼンも終わりにします。

3. DUO リーグと KOSUGE1-16 が行った「トロフィーがない！」プロジェクト報告（中塚義実）

1) DUO リーグとサロン 2002 の紹介

こんにちは、私は筑波大学付属高校の保健体育の教師で、サッカー部の顧問です。今日は高校の時からお世話になっている悦勝先生や、大学でお世話になった松本先生、大学の 1 期上の先輩の越田さんとか、いろんな方にこのプロジェクトの話を聞いていただけるということで、すごく嬉しく思っています。こういう機会を与えてくださり、どうもありがとうございます。

「DUO リーグ」という、高校生のサッカーリーグを1996年度に立ち上げ、今日にいたります。フットボールカンファレンス（注：1/16～1/18 午前中まで金沢で開かれていた、日本サッカー協会公認指導者の研修会。今回は約1,000人の指導者が全国各地から集まり、海外からの参加者、演者を含めて意見交換した）に出ている方はお分かりだと思いますが、日本サッカー協会では、「リーグ戦文化の創出」から「醸成」という段階へ入っていますが、我々はそのルーツになるところをやっています。けどもしかしたらもっとルーツは、私が高校時代に悦勝先生達を中心になってやられていた「北摂リーグ」だったかもしれません。このような意欲的なリーグが全国各地にあったのですが、理念を整理して情報発信させていただいたのが我々のDUO リーグだということです。

「サロン 2002 理事長」について、これも話せば長くなりますが、とりあえずここに会員の方どれくらいいらっしゃるでしょうか（約10名が挙手）。ありがとうございます。

はじめはサッカーの研究者の集まりでしたが、いまは全国各地に百数十名の、多種多様な会員がいます。「サッカー・スポーツを通して21世紀の豊かなくらしづくりを志とする」熱き人々のネットワークで、サッカーだけでなくいろんなスポーツの方々に関わるようになっていきます。実は土谷さんもサロンの会員です。こういう摩訶不思議なネットワークが、このDUO リーグおよび、トロフィーがないプロジェクトに関わっています。

日本的スポーツ観：これまでとこれから (by中塚)

| <これまで> | <これから> |
|----------|----------------------|
| チーム | → クラブ |
| 選手 | → プレイヤー |
| 多くの補欠 | → 「補欠ゼロ」のスポーツシステム |
| 競技志向 | → プレイ・スポーツ・競技 |
| 大会中心 | → 日常生活中心 |
| トーナメント | → リーグ |
| 引退あり | → 引退なしの生涯スポーツライフ |
| 単一種目年中実施 | → 複数種目シーズン制 |
| 「する」 | → 「する」「みる」「語る」「ささえる」 |
| 単一価値観に集約 | → 多様な価値観を認める |
| 学校・企業 | → 地域 |

2) これまでのスポーツとアートの不幸な共通点

ちょっと堅い話になるかもしれませんが、明治維新以降、外来文化として我が国にスポーツが入ってきました。これが学校の中で、おもに教育という色合いで展開していったので、チーム単位、選手中心です。選手とは選ばれた人という意味ですから、逆に多くの補欠がいます。競技志向、大会中心、それも単発的なトーナメント、以下そこに書いてあるようなものが、特に学校を中心とするスポーツのなかで、主たる考えとなっていました。

しかしこれからはそれではいけない。チームからクラブへ。最初にFC.TONのクラブ化の話をお聞きしましたが、まさにそう

いうものを目指していかなければいけないんじゃないか。選手という言葉を我々は平気に使っていますが、その言葉の中にはもう選ばれているという漢字が入っています。そうではなく、プレーヤーとして捉えよう。多くの補欠ではなくて、補欠ゼロを目指し、それでリーグ戦なのだ。

なんてことをいろんなところで話していたら、アーティストの土谷さんと遭遇しまして、「アートも同じようなことがありますよ」と言われました。我々がいう選手は、アートの世界という洋画家や日本画家といったプロの

日本的アート観：これまでとこれから (by土谷)

| <これまで> | <これから> |
|-------------------|----------------------|
| 洋画家・日本画家・彫刻家 | → アーティスト |
| 多くの「在庫」 | → 「在庫ゼロ」のアートシステム |
| 「結果」志向 | → 「制作プロセス」の多様なあり方 |
| 「展覧会」中心 | → 「日常生活」中心 |
| ホワイトキューブ(美術館・画廊等) | → サイトスペシフィック(現場) |
| 単一種目の職人的な技量に特化 | → 多様な表現方法を試みる |
| 「発表」のみのアートライフ | → 「する」「みる」「語る」「ささえる」 |
| 単一の価値観に集約 | → 多様な価値観を認める |
| 学校・企業・国 | → 地域 |

アーティストとなります。けどそうではなく、誰もがプレーヤーへ。そして、誰もがアーティストへ。多くの補欠は、多くの在庫と同じ。展覧会の度に作品はできるが、展覧会が終わると全部在庫になってしまっている。これは我々が競技会をやるごとに補欠を生み出しているのと一緒だなと感じました。

展覧会中心、我々が競技会ばかりを追いかけてやっているのと同じあって、そうではなく日常生活のなかへ。というなかで、「どうやらアートもスポーツも似たような問題を抱えていますね」という話をしていたのがずいぶん前のことです。

3) DUO リーグの理念とはじまり

DUO というのは二重奏という意味です。学校と地域、トップと底辺など、いろんなところが二重奏を奏でることが出来るようにと考えています。

DUO リーグができる前の95年頃の東京都の高校のサッカーシーンは、負ければ終わりの単発的なトーナメントが年に3回ありますが、いずれも1回戦で負けると年に3試合しか公式戦ができません。しかも一つの学校に1チームですから、補欠ばかりで試合に出られない人だらけです。これをなんとかしようと考えました。

カップ戦、負ければ終わりのトーナメント方式は、短期間の単発イベントであり、非日常的な行事で、主催者が運営します。こういうものから、総当たり方式のリーグ戦をやってみよう。リーグがシーズンを形成し、オフシーズンが生まれます。

世界のいろんなスポーツの歴史を見ても、カップ戦で競技者とファンを増やし、リーグ戦でそれが生活の一部になっていくという事例がいくつもあるわけです。ただ、日本の学校スポーツの場合は、なかなかリーグ戦が定着していませんでした。そこに風穴をあけようということで、レベル別に、ある一定の期間、具体的には学校の1学期、2学期でリーグ戦をやろう。すると3学期はオフシーズン〜プレシーズンになります。もちろんその間にカップ戦もあります。このようなイメージを持ちながら、理念を掲げました。キーワードは「歯磨き感覚」とか「補欠ゼロ」ですとか「支える」ということになります。このようなキーワードを掲げながら、この理念に賛同した人達で始めていこうと呼びかけました。そういう意味では「トップダウン」ではなく「ボトムアップ」です。この考えに共感していただいた方々で小さく立ち上げ大きく育てていこうということです。

1996年の前期、第1回DUOリーグ開幕です。創設6クラブの構成は、学校の運動部もあれば、三菱養和というクラブユースもあります。小石川高校から2チーム出ています。Aチーム、Bチームという形で、筑波大附属はこの時、3年生チームと1、2年生チームの2チームが出ていま

リーグ戦とカップ戦の違い

| カップ戦 | リーグ戦 |
|-----------------------|----------------------|
| ノックアウト方式 (負ければ終わり) | 総当たり方式 (負けても次がある) |
| 短期間 | 長期間 |
| シーズン中の単発イベント | シーズンそのものを形成 |
| 非日常的な行事 | 日常生活の一部 |
| 移動をとまなう | 生活圏で行なわれる |
| 主催者が運営 | 当事者による自主運営 |

DUOリーグの理念

- 1. 「歯磨き感覚」「引退なし」のスポーツライフーサッカーの生活化**
 - ・日常生活にサッカーが無理なく位置づけられる
 - ・シーズンが明確になる
 - ・3年間の高校生活にサッカーが無理なく位置づけられる
- 2. 「補欠ゼロ」のゆたかなクラブ育成ーチームからクラブへ**
 - ・誰もがゲームに参加できる
 - ・練習への動機づけとなる
 - ・「リーグ戦」が経験できる
- 3. 強いチームとたくましい個の育成ーレベルアップ**
 - ・同程度の相手と切磋琢磨できる
 - ・レベルやニーズごとの受け皿がある
- 4. サッカーをささえる人材の育成ー自主運営と受益者負担**
 - ・「スポーツの主人公」を育てる
 - ・ピッチを取り巻く多様な人材を育てる

した。一番盛り上がるのは、当然ダービーマッチですね。高体連の大会は DUO の A チーム、B チームの連合軍がナショナルチームを編成して出るというイメージです。

最初は 10 チーム 1 リーグ制でした (いまは 8 チームで一つのリーグを構成)。週末にゲームをします。1 日 1 会場で 5 試合できれば 9 節で終了します。当時は運営も最低限のラインでした。試合日だけ決めておいて組み合わせは直前に連絡するという非常にアバウトな感じでやっていました。

後期リーグは学校の 2 学期から始まります。いざやってみると、最初はどんなものかと遠巻きで様子をみていた人たちも、リーグ戦はなかなかいいじゃないかと思うようになり、以降はどんどん仲間が増えていきます。

中学選抜が初年度の後期から参加しています。中 3 の 9 月以降はなにもやるのがなくなってしまいますが、中学の先生方と相談して、中 3 の選抜を DUO リーグに後期だけ入れようじゃないかと考えました。いまも続いています。

それから、複数の学校が連合軍で参加するのもありにしました。またさらに、特別枠選手制度を設けて、オーバーエイジが 3 名まで出場できるようにしました。これによって私も何試合か出場しています。遊び心にあふれたリーグです。

また、こういう活動を末永く続けていくためにも、大会参加費をしっかりと徴収して、働いた人達にペイしていく形をとっています。審判も基本的には高校生がやり、1 試合につき審判費 1,500 円です。主審 1 人、副審 2 人ですから一人当たり 500 円です。高校生にとっては小遣いの足しにはなるわけですね。

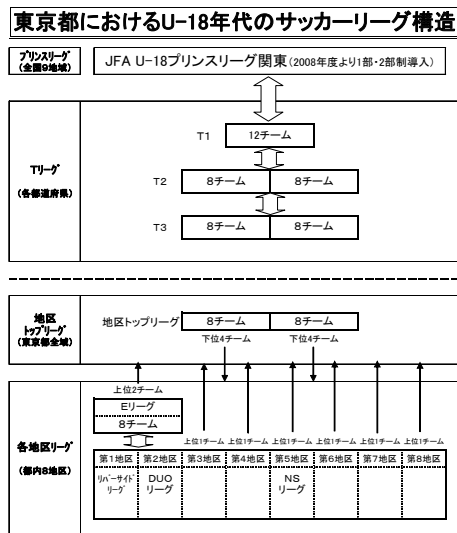
4) DUO リーグの広がり

DUO リーグの歩みと広がりについてですが、その後は DUO リーグそのものの加盟クラブが増えていきます。現在、足立区も仲間に入っています。今年度は 27 のクラブが加盟し、レベル別のリーグ、すなわち DUO リーグの 2 部、1 部、さらにその上位リーグとして、隣接するリバーサイドリーグと組んで、E (East) リーグをつくってやっています。

このような底辺からのボトムアップとは別に、サッカー協会の指導によるトップダウンでのリーグ組織も徐々に整備されています。それが全国 9 地域単位で行われる「プリンスリーグ」であったり、そこにつながる東京都サッカー協会公認の「T リーグ」などです。

DUO リーグモデルのリーグが東京都全域に大きく広がり、次は公認リーグ化を、という動きをしていたんですが、教育関係との擦り合わせがうまくいかなかったこともあって、一時期これは頓挫しました。それがいま、再び整備が進んでいるということです。

現在は、オフィシャル・リーグとプライベートの我々のリーグというふうなつくりになっています。これは試合の様子 (写真略) ですが、左側の写真の真ん中で黒い審判服を着ている子がいると思いますが、このレフェリーは高校生です。高校生が資格をとって審判をやっています。また、お手元にオレンジ色のプログラムがあると思いますが、毎回 DUO リーグではプログラムを作っており、例えばマネージャーが作るページなどもあります。こういうものを通して、マネージャーも学校を超えてコミュニケーションしていけるつく



りにしています。

もちろん、ただ審判をやれというだけじゃなくて、審判の資格をとるための講習会とか、あるいはトレーニングの講習会など、いろいろやってきました。

5) DUO リーグのいまー遊び心の喪失

DUO リーグにおいては、理念は徐々に実現されつつあり、リーグ戦は当たり前になっています。

その一方で、学校教育でこれをするものの限界も見えてきています。顧問の先生がすべてをやるなんてことはありえません。それは当初からわかっていたことですが、それをやるなら地域を巻き込み、あるいは学校を拠点とするなら卒業生を巻き込み、学校を拠点とするクラブを育てていくという視点がどうしても必要です。

また、規模が大きくなるにつれて互いの顔が見えなくなるというマイナス要因があります。最初、小さかった時には、試合が終わったあとに指導者同士でいつも飲みにいき、ああだ、こうだと言いながら、このリーグをよくしていこうねと言っていたんですが、なかなかそうもいなくなってきました。それで、当初考えていた理念の実現が遠のいているところもあります。それと、公認化を巡る功罪というのも見えています。オフィシャルにやらなければいけないんじゃないかと。そっちのほうがいいんじゃないかと。総じて、遊び心、これをスポーツマインドと言い換えてもいいと思うんですけど、これがだんだん失われつつあると感じていました。

そうした矢先に、「DUO リーグのトロフィーがない！」という事態が勃発しました。トロフィーは本当はあったんです。これはレプリカですが、これのもっと大きいのを優勝チームが持ち回りで保管していました。ところが、どこかのタイミングでなくしてしまったんでしょうねえ。それでもレプリカが優勝チームに届くわけですから、みんなあまり不自由を感じていなかったのです。けどやっぱり本物のトロフィーがないのはいかにも格好悪いぞと。DUO リーグがこれだけメジャーになってきているのに「トロフィーがない！」っていうのはね…。

だけど、逆に、それを前面に出すことで面白くなるんじゃないかと思って土谷さんに相談してみたのが 2007 年 8 月頃の話です。もしかしたら遊び心の回復にアートとの融合が生きてくるんじゃないかなと思いました。

6) トロフィーがない！プロジェクト

2007 年のトヨタ・カップ、浦和レッズと AC ミランの試合の日に大きく前進しました。土谷さんのアート工房に集まって、鍋をつつきながら試合を見ようということになったのですが、そこで靴削家の佐藤いちろうさんと出会うわけです。そして新しいトロフィーの方向性も定まりました。

まずは土谷さんが、DUO リーグのロゴをつくってくれました。歯磨き感覚のスポーツライフを謳っているの、歯磨きの上に DUO リーグが乗っているイメージになっています。「トロフィーがない！」プロジェクトのロゴも考えてくれました。

「靴磨き講座」。ここからは、佐藤いちろうさんの話になって来ますが、高校生って年間に 3 足程スパイクを履き潰すわけですね。それが燃えないゴミになっているんですけど、実はそこに素材がいっぱい眠っているといいました。彼は、革を素材とするアーティストなんです。これをうまく再生することで面白いことができるのではないかということです。

前期リーグ末に DUO リーグアウォーズをやって、そこで完成したトロフィーを渡そうということで、逆算するうえでカレンダーをつくりました。靴の手入れの仕方なんかも書いてあります。

これをすべての DUO リーガーに配布しました。だいたい 1,000 人程度在籍していますが、それぞれの勉強部屋に貼るよという指導とともに配布しています。

そして、第 1 回靴磨き講座を本郷高校でやりました。このあとで靴の解体の仕方の講座が出てくるのですが、毎回いちろうさんがこんな格好で、これは靴に関するうんちくを述べておられるところですね。その後、靴磨き講座、および靴解体講座の場所は、DUO リーグの試合会場で、試合の行われている横で、試合終了後の両チームの選手が古い靴を持ち寄って、靴を磨き、そしてカッターで解体するというのをやりながら、最終的にはアーティストのいちろうさん達が一生懸命頑張ってくれて、このようなトロフィーができあがりました。

おそらく世界初、履き古した靴でできた、「履けるトロフィー」です。

このプロジェクトの意義をざっと話しますが、ともに豊かな暮らしを担う文化であるスポーツとアートの融合プロジェクトであるということ。単なる廃品と化していた履けないシューズを再生させるリサイクル運動であったということ。高校生自身がカッターやハサミをもって作業することで、生きる力を獲得する試みであったということ。こういうことは、最初は考えていませんでした。結果的にそうになっていたなということです。

それから、靴磨き解体講習会がクラブを超えて仲間が集う交流の場となりました。なんといっても遊び心を取り戻す試みであったと思います。プログラムにも

「トロフィーは遊び心のシンボル」という文章を載せていますが、この単発プロジェクトで、本当に遊び心を取り戻せたかというとまだまだですけども、それでもオフィシャルにどんどん向かっていこうとする、ちょっとギスギスしがちなところに、風穴をあけることはできたかなと感じています。

では実際の製作のところを、佐藤いちろうさんとKOSUGE1-16の土谷さんが一緒になって靴磨き&靴解体講習会、そして製作



撮影：齊藤哲也

のところまでやっていただいたので、そのあたりをいちろうさんに紹介していただきたいと思います。

7) 履けない靴でできた履けるトロフィーの製作過程 (佐藤いちろう)

佐藤いちろうといいます。僕の肩書きは、靴のアーティストということですが、アーティストというよりは、クツ創家という肩書きでやっています。靴郎堂本店とは、土谷さんとの繋がりにもなるんですが、下町の押上という、今度第2東京タワーが建つ地域に僕は住んでいました。その家で展覧会をやりました。その時に展覧会の「展」の字をお店の「店」にした方が、お客さんがいっぱい来るのではないかと考えて、名前をつけると、靴屋さんと間違えて入ってこられる方が結構いたりして、たくさんきてくれました。今見てもらっている紅白幕なんかも店覧会でつけたものです。それで、こういった感じで磨きもやって、僕がこうふうにやるんだよという指導をして、そのあとアトリエに持ち帰ってトロフィーを製作ということになりました。

これは木型と言いますが、60センチのもので、土谷さんに作っていただいて、僕がその縫い合わせをしたり、立体的にする吊り込みという作業ですが、椅子のクッションを引っ張るような感覚だと思ってくれればいいですが、こんな感じで製作しました。

4. 演者間の意見交換

1) KOSUGE1-16 と FC.TON のコラボレーションについて

辰巳：私自身は小学校の頃、体育と図工と音楽は5段階の2で、体育のほうは、サッカーと出会ったおかげで、ある程度人並みにはできるようになりましたが、美術はちょっと壁の向こう側という感じがありました。

美術館自体は嫌いじゃなくてよく行きますが、やはり見るほうです。アートを額のなかの存在だと思っていたんですが、今回 KOSUGEI-16 さんとやらせていただいて、あっこんなのあるんだなあと思い、視聴者参加型というのが大変楽しかったです。一緒に AC-21 の人形制作に参加した、うちのレディース所属の人が会場にいるので、少し話してもらいます。

山田：TON レディースでやらせてもらっています山田と申します。去年の 12 月に KOSUGEI-16 で大きなサッカーボードゲームの製作を手伝わせていただきました。もともと白い大きなプレーヤーがいて、そこに色を塗っていくんですが、子供たちもすごく楽しそうで、参加させていただいてありがとうございました。

辰巳：うちの子供達も実際に、色塗りと組み立てと 12 月のサッカーゲームにも参加させていただいていたんですが、それぞれ違う子ですが、みんなすごく楽しんでやりました。特につくった子達は自分達でチーム登録して大会にも出てきて、自分達の考えていた芸術の世界と違う世界があって、それからクラブとしてもこういう世界が広がったと思います。またこれからも長い付き合いをしていただきたいなと思います。

2) トロフィーがない！プロジェクトのその後

土谷：僕自身もサッカーをした経験が草サッカーぐらいしかしたことがなくて、クラブの活動に近づいたのは DUO リーグでの試みが初めてだったんですが、やっぱりスポーツというのはすごくお金がかかるものなんだなということを感じました。トロフィーをつくるプロセスで、靴底の部分は余っちゃうんですね。アッパーの部分は、トロフィーになりましたが、そのソール部分を活かしてなにかできないかと考え、佐藤いちろうくんと相談して、スキンプロジェクトというものを立ち上げました。ソール部分でサンダルをつくってみようということになりました。

DUO リーグのグラウンドは芝生のように整備されたところがほとんどなく、土のグラウンドなんです。だから、ソールのポチポチ、スパイクの部分がなくなる前に、柔らかい素材でできている革の部分が先に穴があいてしまうことに気づきました。だから、ソールがほとんど新品同様なんです。それを使ってサンダルができないかと相談したら、できるよということで創りました。これは今、金沢 21 世紀美術館のミュージアムショップに売っています。

どういう試みかという、この収益の割を DUO リーグに返そうという試みです。それで少しでもグラウンド費用とかにあてていただければと思います。お金のかかるスポーツで特に高校生なんかは収入源がないですから、これを一つの収入源にしてくれればなと思うぐらい売れるアーティストならいいんですけどね。今、実際 3 足売れています。1 足卸値が 16,000 円になります。つまりいちろうくんから買うと 16,000 円。美術館で売られている値段は 21,000 円です。職人はディスカウントしません。ようするにフェアトレードなわけですね。2,000 円近くが 1 足売れるたびに DUO リーグに入ります。

もう一つの方向性として、やっぱり職人がつくと高くなってしまいますので、サンダルをつくるワークショップをやろうと考えています。だから自分のソールをもってきてくれると、その場で 2,000 円ぐらいでサンダルがつくれるという試みもこれからしていこうとしています。

東京都のサッカークラブ、高校のサッカー部なんかは、やきそば焼いてガス爆発とかありましたが、文化祭でやきそばなんか焼かずに、サンダル売ったらいいんじゃないかなと思っています。高校生の屋台ができるんじゃないかと、いろんなところで今仕掛けています。乞うご期待のプロジェクトです。

アッパーの部分でトロフィーにしきれなかったのをもう一回革に戻し、「Pig Skin」という作品をつくりました。これは実は某美術館には展示されています。この作品はいま水戸美術館にアート作品として展示されていますが（※1）、これを今度革屋さんとして出荷しようとしています。例えば鞆をつくったり筆箱をつくったり、いろんなものになると思います。

※1 2008 年 10 月 25 日～2009 年 1 月 18 日まで水戸美術館現代美術ギャラリーで企画開催された展覧会に

KOSUGE1-16のインスタレーション「KOSUGE FOLDER_01〜SPORT PARK〜」の一部として展示された。

5. フロアーとの質疑応答

<質問①>

遊び心を取り戻すためにという話があったんですが、遊び心を取り戻した高校生は、サッカーに対してどのように変わったのですか？

中塚：本当に取り戻せたかどうかというところがまずあると思います。だいたいこの一連のプロジェクトも、もちろん私だけがおもしろがって関わっているわけではなくて、DUO リーグに携わる方々に声をかけながら、例えば、KOSUGE1-16のアトリエを訪問したり、いろいろするんですけど、そういうのに乗ってくる人と全く無関心な大人とが出てくるわけです。情報は等しく流していても、です。乗ってくる大人に指導される高校生は、このプロジェクト自体をかなり面白がってくれていると思います。だからといってプレーがどうなったかというのは特にないんですが、こんな面白いことがあるんだということに気づくわけです。あまり乗ってこない指導者のところの高校生には、たぶんこの遊び心というメッセージも届かないまま終わっているかなと思います。だからそういう意味では、これを単発で終わらせるのではなく、次に続けていきたいですね。

実はあのトロフィーは12年間使おうということにしているんです。そうするとあの作業は今後12年間やらないのかとなると、やっぱり抜け落ちると思うんですよ。なにか違う形で続けていきながら、実はスポーツは遊びなんだという原点のところ、知らず知らずのうちに帰っていかれたらいいかなと思っています。そうなったときに、たぶんプレーのなかにも、もっともっと遊び心のあるプレーができるようになるんじゃないかと、これは勝手な推測と希望をもっているところです。

<質問②>

TONの活動場所は、どんなところでやっていますか？拡大すれば拡大するほど場所の確保が大変になると思うのですが。

辰巳：一応地元の小学校の好意で、グラウンドを小学生、中学生にかぎっては使わせていただいています。それから、地元の小学校の体育館を週2回ぐらいおさえて、順番に各チームでやっています。あと犀川という川の河川敷に豆田サッカー場という土のグラウンドがありまして、大人のコートで2面とれます。そこはナイター施設もあるし、けっこうとれるので使っています。あとは、中学校のグラウンドは夜は開放していますので、そこでナイターをとって練習しています。だいたい各チーム週2〜4回ぐらいの練習なので、2つほどグラウンドを夜おさねれば、なんとかまわります。

質問者：私も、大学の現役を終わってから当時、浦和クラブというところで、ヤンマーに入れ替え戦を挑戦したこともあるのですが、練習は週1日でした。一昔前であれば、ある程度までいけば、自分で練習をして、まとまって練習するのは週1日か2日ぐらいで、あとは試合だけという形でもいけたのかもしれないですが、これからは、活動場所というのは重要になってくると思います。そのかわり、私の希望としては、柏市が農地を芝生にしています。それを転用してレイソルのグラウンドとしてつかっている事例があります。農地はほとんどそういう転用はできないのですが、行政がやるとそれが可能になるということの現れとして、金沢のほうでも、是非行政を動かしていただきたいと思っています。

私は埼玉出身で、嫁は福島ですので、地方のサッカーの活性化の意味でもよろしくお願ひしたいと思っています。デットマール・クラマーは、技術はアートだと言っていました。その裏には、自由さがあるから創造性がでてくるというキーワードがあり、遊び心をうんと育てていきたいと思っています。

それから中塚先生にお願いがあります。遊び心のなかにもやっぱり怪我とかそれに対する保証とかができてきま

す。そのかわり本当に遊び心を知った人達は、お互い傷つけ合わないはずです。そういうところにフェアプレーというものがでてくるのではないかと思います。将来サッカーがこういうふうになってくれたらいいなという望みです。

東京のほうでは郵便のなかに毒の入った食べ物があるとか、私達が育った時期では考えられないようなことが起こっています。私の生まれは埼玉県の安行というところで、下町の良さというのはわかっているのですが、これからサッカーというキーワードでなんとか社会が安全で楽しいものになればと思います。みなさんお互いが力を合わせて、サッカーまたはアートでお互い豊かな心を育てていったらよいと思います。

<質問③>

かなざわ総合スポーツクラブには、去年の5月に相談されて、なににもできないということで入りました。私もものづくりをやっております、主婦としてのものをつくる人間としても、楽しかったなと思いました。主婦としては、子供達がものを大事にしなくなっていることで、このような靴磨きがいいです。我々は親の靴を磨かされた世代ですが、今の子供達は、普段ではしていないんだと思います。サッカーの子供達はものを大切にしていると思うんですが、そういうなかでは面白いと思いました。ものをつくるという時点で、一番もとなる、佐藤さんが靴をよく知っていらっやっや、先ほど先生もおっしゃいましたが、怪我にも結びつくことだと思います。それにリサイクルもできて、なんか全然違う形でもスポーツって関われるんだと思ってすごく面白かったです。

土谷さんに質問ですが人形のボディーはどちらで用意されたんですか？

土谷：あれは僕がつくった型があって、樹脂で量産しています。ひな形があります。

質問者：業者の搬入をしたのは、東京の方か地元の方かどちらですか。

土谷：小菅界隈のサッカーゲームをつくった職人さん（東京）と運びました。

驚田：組み立てるパーツのところまでを KOSUGE1-16 の仕事場でつくって、それを金沢に運びました。つぎに組み立てるというプロセスで、一緒に組み立てをしてくれる方を募集しました。その時に参加してくれた方と、FC.TON の方々もたくさん協力してくださいました。

質問者：ランドセルを記念にというのがありましたので、高校生の卒業記念に自分たちのサッカーでサンダルつくってというのも面白いなと思いました。

佐藤：僕も実際靴磨きの時に、高校生がそんなことしたことないと言っていました。僕は小学校の時にサッカーをやっていたというか、クラブはなくて、僕の生まれたところはなくてですね、勝手に小学校のグラウンドを使ったりしてしてました。田舎なのでけっこう無料で貸していただいていたので、その時に、僕はお金がなかったので、スパイクを大事にしようとして靴磨きをしっかりしていました。それがあって、こんな面白い形に気づき、こういうものがつくれたらいいなというところから靴を創ろうという経緯に至ってます。

<質問④>

私は金沢二水高校というところで教員をやっております。本来は陸上競技なのですが、二水高校の文化祭というのが、県下でも高い集客率を誇り、5〜6,000人ほど訪れます。ただちょっと行き詰まってまして、エコの問題とか考えていかなければいけないと考えていた矢先に、ヒントをいただきました。

例えば2年生はみんなダンス、3年生はみんな食べ物をつくるとか、そういう系統のものしかなくてすごく行き詰まっていた。今日の話を聞いて、エコで思い出にも残るもので非常に興味深く聞かせていただきました。

私達の学校とタイアップしてやっていただけるかどうかということでお聞きしたいんですが、どうでしょうか。

土谷：是非是非ですよ。やっぱりパートナーシップを結べるクラブとかリーグとかが増えていけばいくほど、いいかなと思っています。あともう一つは、金沢で、いちろうくんや僕みたいなものづくりを担えるアーティストと一緒にできる人がほしいですね。

<感想>

吉田と申します。本日プレゼンさせていただいた辰巳が務めております学校の教頭です。もともと美術の教員であり、金沢美大のデザインのほうを専攻しました。

ずっと、高等学校の美術を担当してきましたが、今、特別支援学校というところで子供達と出会って、大変日々、新たな感動とかがあります。

一方では、高校のころからスポーツが大好きで、サッカーではないんですが、バレーボールをずっとやっていました。共通する部分がたくさんあると感じ、自分のなかでは「表現」という言葉が一番ぴったりすると思っています。美術やアートは、表現ですが、スポーツもやっぱり表現なんじゃないかなと思います。

表現する時に、表現が先にありきではなくて、やりたいなとか創りたいなとかいう心が一番大事だなと思っています。今、先生方のお話のなかにその原点となるものがいろいろあるなと思い、大変いい時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

以上